

二八三

水

越

五  
子  
譜

二  
編

卷







北越雪譜二編卷之四

目錄



- 異獸
- 弘智法印
- 白鳥
- 浮島
- 美人
- 苗場山
- 鶴恩小報ゆ

通計 十三條

- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下標準
- 三四月の雪

雪譜二編卷下下是ヨリ四卷

廿三ヨリ

文溪堂藏

北越雪譜二編卷之四

越後 鈴木牧之編選  
江戸 京山人百樹増修

○ 異獸

魚沼郡 堀内より十日町へ越る所七里あり村はあまごも山中の間道  
ありきてある年の夏の夕どり十日町のちと問屋わりの内の問屋へ白縮  
るふやどいそぎおるべしとひらけぬあまごの日の昼をぐる頃竹助とのふ  
剛夫をえ〜荷物をおろせとひらけぬ〜たけけりかくて途も稍く半ふい  
ゆるころ日ざ〜ハセツふちり〜竹助志を〜と〜とちのかさろの石ふ腰かけ  
焼飯を〜ひの〜ふ谷間の根笹を〜〜け〜來る者ありちり〜ありたる  
を見ま〜猿ふ似て猿ゆもあ〜毛頭の毛長く脊ふた〜半ハあり〜  
丈ハ常並の人よりた〜顔ハ猿ふ似〜赤〜眼大〜光りあり竹  
助ハ心剛ある者ゆゑ用心ふ〜山刀を搜〜斬んと身かま〜け〜ふ  
此ゆゑハさる氣色も〜竹助が石の上ふ〜焼飯小指〜と〜と







此事<sup>こと</sup>を患<sup>うれ</sup>ひ歎<sup>なげ</sup>きけり月<sup>つき</sup>やけより三日<sup>さんじつ</sup>ふあつる日の夕<sup>ゆふ</sup>ぐと家内<sup>けうち</sup>のり<sup>り</sup>の農<sup>のう</sup>  
 業<sup>わざ</sup>よりかつらざるをありしやがのり久<sup>く</sup>しがりあきまじり娘<sup>むすめ</sup>人<sup>ひと</sup>  
 のりひごら月<sup>つき</sup>やけのらまひをかたつ栗<sup>くり</sup>飯<sup>いひ</sup>をぬぎうらあきくまじ  
 るごらまじぐふまじまじあきくまじあきくまじあきくまじあきくまじ  
 けりまじ娘<sup>むすめ</sup>ハ此<sup>こゝ</sup>夜<sup>よ</sup>より月<sup>つき</sup>やけをまじりしゆえ不思議<sup>ふしぎ</sup>とおひひるまじ  
 身<sup>み</sup>をまじりあて御<sup>ご</sup>機<sup>き</sup>を織<sup>お</sup>果<sup>は</sup>その父<sup>ちち</sup>問<sup>と</sup>屋<sup>や</sup>持<sup>も</sup>去<sup>さ</sup>り往<sup>ゆ</sup>着<sup>つき</sup>しとおひ入<sup>い</sup>頃<sup>ころ</sup>  
 娘<sup>むすめ</sup>時<sup>とき</sup>あき守<sup>まも</sup>俄<sup>あは</sup>小<sup>こ</sup>紅<sup>べに</sup>潮<sup>うしほ</sup>ふありしゆえまじり我<sup>われ</sup>が歎<sup>なげ</sup>きを聞<sup>き</sup>てかのり  
 我<sup>われ</sup>を助<sup>たす</sup>けんと聞<sup>き</sup>く人<sup>ひと</sup>くも不思議<sup>ふしぎ</sup>のおひひをまじりけりと語<sup>かた</sup>り  
 そのころ山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>少<sup>すく</sup>くなまじり見<sup>み</sup>るものもあり一人<sup>ひとり</sup>あても連<sup>つ</sup>ある時<sup>とき</sup>ハ  
 形<sup>かたち</sup>を見<sup>み</sup>せまじり又<sup>また</sup>高<sup>たか</sup>田<sup>た</sup>の藩<sup>はん</sup>士<sup>し</sup>材<sup>ざい</sup>用<sup>よう</sup>あき樵<sup>せう</sup>夫<sup>ふ</sup>をまじり黒<sup>くろ</sup>姫<sup>ひめ</sup>山<sup>やま</sup>小<sup>こ</sup>入<sup>い</sup>り  
 小<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>を作<sup>つく</sup>りし山<sup>やま</sup>小<sup>こ</sup>日<sup>ひ</sup>をうのせし時<sup>とき</sup>猿<sup>さる</sup>小<sup>こ</sup>似<sup>に</sup>し猿<sup>さる</sup>あもあきざる物<sup>もの</sup>夜<sup>よ</sup>中<sup>なか</sup>  
 小<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>小<sup>こ</sup>入<sup>い</sup>りし焼<sup>や</sup>火<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>あきまじりたけハ六<sup>む</sup>尺<sup>せき</sup>をうり赤<sup>あか</sup>髪<sup>かみ</sup>裸<sup>はだか</sup>身<sup>み</sup>通<sup>と</sup>身<sup>み</sup>灰<sup>はい</sup>



山中異獸の圖



秋月彙牧之羊





色あそく毛の脱ぬける小似かたり腰こしより下小枯草くせをまると此物このものよく人のいふ  
 ことふあそくひさのち小穴あなよく人小馴なれと高田の人のいふを按おしるふ和漢三  
 支圖會ぶ寓類ぐうの部小飛驒ひ美濃みあるいハ西国の深山しんざんも如件ごと異獸いある事  
 をあるせりさまびらびの深山しんざんもあるものあるべし

○火浣布

空曆年中平賀鳩とら漢源けい火浣布くわんぷを創製そつせいし火浣布考くわんぷかうを著あし和漢の  
 古書こを引本朝ほん未曾有そその奇工きこう小誇せうたり没めつしそのち其術そのじゆつつらうず好事こうじ  
 家の憾事くわんじとよまゑり小我國嘗わがくに火浣布くわんぷを作るの石いしを産うまそその在ある所ところ  
 〇金城山きんじやうざん。卷機山まききざん。苗場山なふばざん。八海山はつかいざんその外ほかもありその石いし軟弱なんじやくしよく尻しりを  
 めつても犯かまへぎ本ほんの軟なん石いしありいろハ青く黒くこまをくらげけバ  
 石綿いしわたを出いす此石このいしを得えて試ししふ石中いしちゆう小在ある石綿いしわたといふものハ木綿もくわたとを  
 細く袖そでするを二三分さんぶんほどふちぎりしるやうあるものあり是こゝを紡績ほうしんする小秘術こひじゆつ



ありて火浣布を造るあり其秘術を得ば小女子も火浣布を織るべし  
○さて我驛中小稻荷屋喜右門とのこの石綿を紡績する事小千思  
万慮を費し竟ふ自その術を得て火浣布を織り又其頃我近  
村大澤村の医師黒田玄鶴も同く火浣布を織る術を得たり各々  
秘しその術を入ふ傳へざるふありし時より村つぎふておろし火浣  
布の奇工を得たるも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此西  
人の説をききし小力をつく其丈以上あるも織らざりあるも其機工容易  
ありとより平賀源内六織を五六尺の過と火浣布考ふいりまを玄鶴が源  
内ふまよりより事ハ玄鶴ハ火浣布の外ハ火浣紙火浣墨の二種を造  
りり火浣墨を以て火浣紙小物を造り烈火ふかけし火とありしを  
ふとりいづし火氣さむむ紙も字もそのごとく造るごとく其實用  
をいふ火浣布も火浣紙も火浣の供ふ憑 ぐういんともいふ火り

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

遇ハ俱ハ火とあり人ありし火中よりいづきま火と俱ハ碎けし形を  
あまた灰とありざるの事あり觀具ハ用うる所さあぐあざり源内  
死し奇術絶なりし小件の西人いづし火浣布の機術再世いづし  
嗚呼可惜此兩人も術をつくまざりし後いづし火浣布もよび世ハ絶  
なりかの源内ハ江戸の饒地ハ火浣布を織りしゆ其聞え高くその  
西人ハ越後の辟境ハ火浣布を織りしゆ其名低しゆ其ふらふある  
し好專家の一話ハ供す

○弘智法印

弘智法印ハ見玉氏下総国山本村の人あり高野山ハありし密教を  
学び後生国ハ飯り大浦の蓮花寺ハ住し行脚し越後ハ來り三  
嶋郡野積村ハ里言海雲山西生寺の東岩坂とのハ所ハ錫をよめ草  
庵をよむいし貞治二年癸卯十月二日此庵ハ寂せり辞世とす



口碑ふつとつる哥小「山石坂の主を誰ごと人間を墨繪小書」松風の音  
 遺言ありとく死骸を不埋今天保九をさる事四百七十七年ふりこ  
 りと枯骸生るが如し是を越後丹四奇の一小教ふ此事雜書り  
 散見をさるも圖をのせつるものなりゆゑ小圖をさるふいづて此圖  
 ハ余先年下越後ふあをびり時目撃したる所あり見所とて面  
 部のも手足ハ見えど寺法ありとて近く觀る事をゆるさば閉眼  
 皺ありと眠りうらるが如し頭巾法衣ハ此のまゝありあはるるるる  
 是他国未聞がる越後の一奇跡あり

百樹曰唐土の弘智小似する事あり唐の世の僧義存没して  
 のち尸を函中ふ置毎月其徒とをいづり丸髪の長さを前か  
 薙常とて百餘年を経るも廢せざりしが後国のとづねるふ  
 因てとを火葬せしとて又宋人彭乘が作墨客揮犀ふ

雪譜二編卷之下

廿八

文溪堂藏

別洲の僧无夢も尸を不埋丸髪の長さを義存小同トかりし



婦人の子小摸らば  
 より丸髪のびざりし  
 とて事ハ五雜組小  
 記て枯骸の確論あ  
 るども釈氏を詰ふ  
 似する説ありとて小  
 贅せむ高僧傳小義  
 存が度あり  
 うと覺がさのとて  
 詳究せむ

○土中の舟

蒲原郡五泉の在一里をりふ下新田との村あり或年此村の者も度  
 ありと阿加川の岸を掘りふ土中より長さ三間をりりの船を掘り



全体少くも腐れ形今の船小異つるものありて金具を用うべき処も  
鯨の鬣を用ひ寸鉄をもやどしする処も木もまよ何の木も  
弁どる者ありてそとくハ異国の船あるんといふと余下越後小遊  
一 時杉田村小野佐五左門が家あそかの船の木も作りたる硯箱を見  
一 小木質漢産ともなりて上古漂流の夷船あやわん

○白鳥

前より如く雪譜と題するもの外事をいふ哥ふりて落題あれ  
と雪はまよ末ふりて一 姑くおひいづとふまよ○天保三年辰四月  
我が住塩澤の中町小鍵屋某が家のやうい喬木あり此樹小鳥巢を  
むさび雛稍く頭をいづと巣のうちに白き頭の鳥を見主人怪し  
人をしそ是を捕へあり一 小全身ハ鳥小く白く嘴眼足ハ赤き鳥の雛  
あり人々奇とて集り觀る主人俄小籠を作らせ心を盡し養ひ

雪譜二編卷之下

廿九

文溪堂藏

や長ども鳴音も鳥小異ありて我が近隣ありて朝夕とてを觀す  
奇鳥ありて人も多く江戸へ出て觀物小せんといひも有  
主人をいそゆさびかく其冬雪中ふりて山の麴瓶ありて餌小  
人家小きてりて食をぬきむ事雪中の常ありて此の所為小籠  
ハかぎて白鳥ハ羽をり椽の下小ありとてに初編ハ白熊の事を載  
たりゆゑ白鳥もまよこ小記にぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端  
小兩頭の蛇いづを捕ふ長さ一尺ふたりとて頭の二ツ並びて枝をう  
のりりもかき常の蛇ふりてあふまよ古き箱小の餌も  
りてかき一 小二三日をてりて逃げき一 やあてりをたづぬ一 ぐとを  
ざりーとぞ











愕然たり糞壤妖花を出せと云はかる事ありていひしるるべし  
○再按小野の小町ハ羽州の郡司小世の良實の女あり楊貴妃ハ  
蜀州の司戸元王の女あり和漢俱ハ北国の田舎娘世ハ美人の名を  
つとふ北方小佳人ありといひしるる北ハ陰位ありて女ハ美艷を出せ  
ゆやわらん二代目の高尾ハ治野州ハ生と初代の薄雲ハ信州ハ産ん  
ともハ北廓ハ名をあせりてさきハ越後ハ件ハ美人を見しるる北国  
ありていひしるるべし

○蛾眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月新羽郡越後推谷の漁人推谷ハ彌使の  
海上ハ漁し一木の流し漂ふを見て薪ハせをやくと拾ハ取て家ハ  
久の水を乾さんとき底ハ豆寄をうを推谷の好事家通りかり是を  
見きたるぬ木とかりハ熟親ハ蛾眉山下齋といひハ五大字刻しあり

雪譜二編卷之下

しをりつと云かの国の物とかりハ漁人ハ薪をうてていひうけきると云  
さて余ハ旧友觀劭上人ハ推谷ハ田沢村強学の聞えあり嘗て好事の癖  
あるを以てかの橋柱の文字を双鈎刊刻し同好ハあり且橋柱ハ題  
まる吟詠をといひ是も又梓ハし世ハ布んとせしとハ故ありといひまご  
不果ハの橋柱ハ後ハ御領主の御藏とありしと推谷ハ余ハ同国あり  
とも幾里を隔し其真物を不見今ハ遺憾と云ハ姑傳寫の圖を  
以てしハ載つ。○百樹曰牧之翁ハ此草稿ハのせしる番を見しハ少くハありハ所直  
百樹曰了阿上人ハ和哥の友相場氏ハ推谷侯の殿人と云て上人  
の紹介をりつと相場氏ハ對面しハ件の橋柱の事を尋ねしハ  
余ハ謂しハ橋柱ハありし標準ありと云俗ハ書翰帛といハ物  
ハ作りしるを出しし其圖を示さる余ハ友の画人千春子が真  
物を傍ハし縮圖あり蛾眉山下齋といハ五字ハ相場氏



こづく心こころを深ふかめたるのさまさましとてとて 下したの圖ずを彫きする人の頭かぶを  
左ひだりの願ねがせその下したの五ご字じを彫きつけハ是こゝより左ひだりの蛾が眉び山さん下  
橋はしありと人ひとの心をこころの標準ひょうありとくさくさとくさくさ是こゝより美み理り  
渙くわん然ぜんたり今いま俗ひん小せう指さしを名なづきとくさくさとくさくさ是こゝより所ところを記し  
するを問まする事ことあり和漢わくわんの俗情しやくじやうあり事ことあり○さて此こゝ標ひょう  
準じゆんを得える實事じつじをさく北きた海かいハいづこの所ところも冬ふゆふいさく常じやう小  
北風きたかぜ烈れつく碣きやくの物ものをうちよめる椎すい谷やハたきりのふとがりかりき所  
ゆゑ貧民ひんみん拾しゆひ取りとり薪こゝろとるを事こと常じやうありあるふ文政ぶんせい八はち酉ゆうの  
十二月じふにがつ例れいの如ごとく薪こゝろを拾しゆひ出です小物せうぶつあり柱ちゆうのごとく浪なみ小漂せうふ  
をさくさく人の頭かぶとさく物ものあり甚さう兇けう惡あくあり貧民ひんみん等ら悞ごとくち  
さりのめくげより見居みゐる小此こゝの竟つひ小碣きやくふらちあげあげあげあを  
見みる人ひとく立たたりとたふ小文字せうもんじハあまども讀よ者ものあり是こゝハ何なにの

雪譜二編卷之下

あるんとさめぐ評ひやう居ゐるをりりもも近ちかき西さい禅ぜん院いんの童どう僧そう  
通とりかり唐詩たうし選せんありわをる蛾が眉び山さんの文字もんじを讀よここハ唐土たうどの  
物ものありとさく貧民ひんみん拾しゆひて持もつりさく唐土たうどの物ものとさく薪こゝろゆも  
せざりせハ此事こゝじ開傳かいでんハハ竟つひ小主君しゆきんの藏ざうとありとと語ごとくさく  
○按ある小蛾せうが眉び山さんハ唐土たうどの北きたハ在ある峻岳しゆんがくハ富士ふじふもくさくくさくく高山こうざん  
あり絶頂せつていの峯かみ双立しゆたうハ八字はちじをさく蛾が眉び山さんとありとありと此こゝ山さんの  
標準ひょうじゆん日本にっぽんの北きた海かいハあまさくさくさく其その水路すいろうを詳究しやうきゆうせんと唐土たうど  
歷代れきだい州郡しゆうくわん沿革えんげう地圖ていずハ抑おさへ清国しやうこくの道程みちぢやう圖ず中ちゆうを檢けんする小蛾せうが眉び山さん  
ハ清朝しやうせうの都とを距はなること日本にっぽん道みち四百里しひやくり許こゝろの北きたハ在あり此こゝ山さんハ遠とほくさくさく  
一ひと條ぢやうの大河たいが東とうハ流ながる蛾が眉び山さんの麓ふもとの河がハ皆みな此こゝ大河たいがハ入いる此こゝ大河  
瀘州ろしゆうを流ながる三峽さんせつのあまを過すぎ江漢かうはんハ至いたり荆州けいしゆうハ入いり洞庭湖たいていこ  
赤壁せきひ。潯陽江しゆんやうかう。揚子江やうしかうの四大江しやうたいかうハ通とほく江南かうなんを流ながる東海とうかい



小入る是水路日本道五百里をりりありきさて件の標準洪水ゆてや  
 水小入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を蕩漾周  
 流しく朽沈む溜くする水路五百餘里を流きとく東海小入り巨濤小  
 千倒し風波小万顛をきとく断折碎粉せむ直身挺然とく我  
 国の洋中小漂ひ北海の地方小近より推谷の貧民小拾とく始く  
 水を辞と既小一燼の薪とあるべきを幸小字を識者小遇ひく死灰を  
 のがも韻客の為小題咏の美言をうけくするのそあはるる竟あは  
 推谷侯の愛を奉とく身を宝庫小安んど万古不朽の洪福を  
 保つ隻奇妙不思議の天幸あるとく實小稀世の珍物あり  
 縮圖左のごとく  
 丈一丈餘 周二尺五寸餘 木質弁名べく

娥眉山下喬



登苗場山之図

霄間清露湿衣中  
無際平蕪四望秋  
呼吸極方通帝座  
徘徊却愧問天人  
吐息毛雲とや

わろき舞臺の秋  
秋夕尾牧之

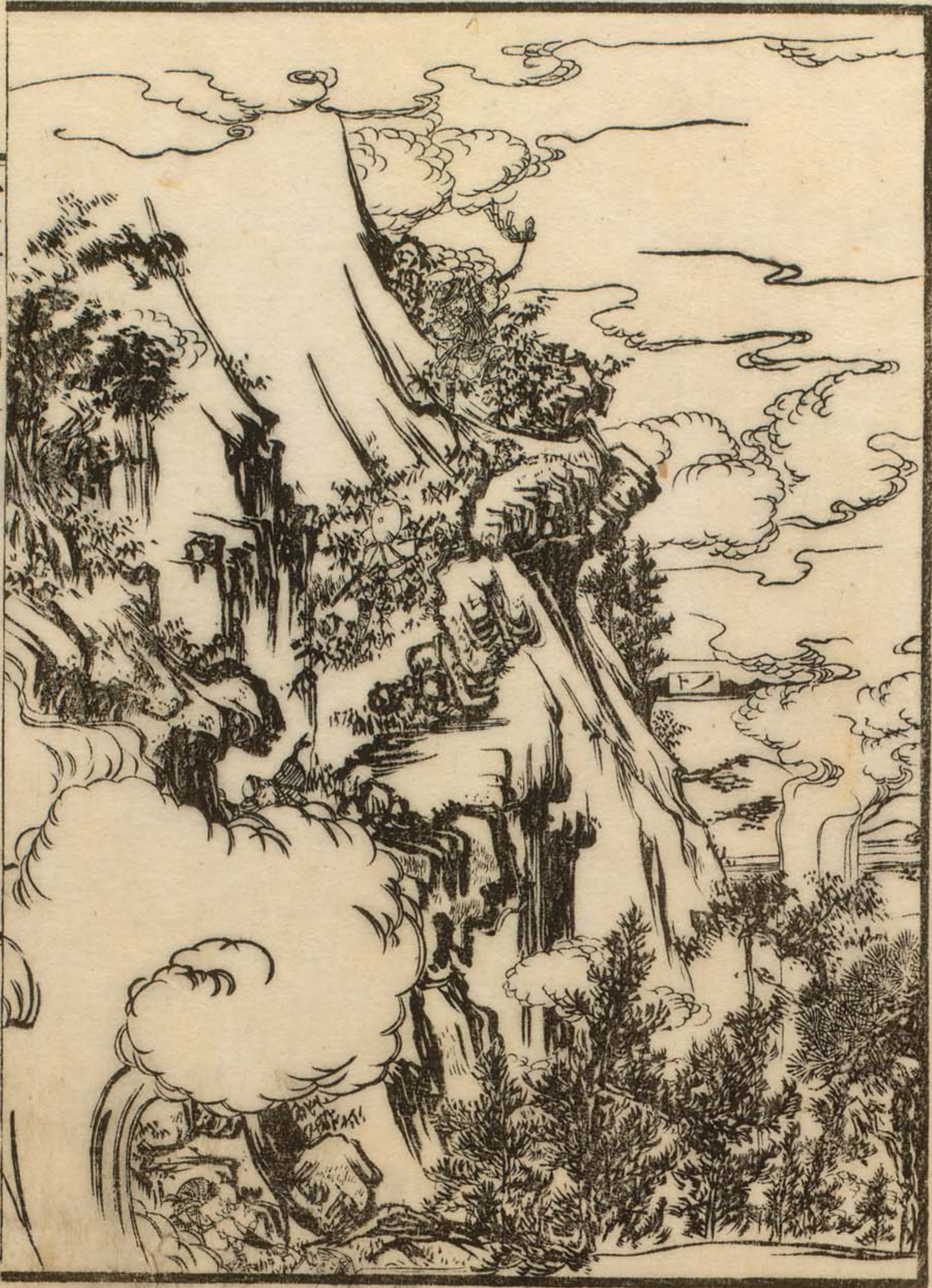
下

里

川曲千別信

秋

秋



下



按ざる小蛾蛾同韻、五何反のまぶ相通あひつとく往く書見を橋をきょうをま喬小  
 作たる頗おほる異体あり依よる明人黄元立がト字考正誤清人顧炎武が  
 亭林遺書中小在る金石文字記あるハ碑文摘奇文藤花亭十種  
 あるハ揚霖竹菴が古今釈疑中の字體の部あると通卷一遍サ搜  
 索さるとども喬の字あり蛾眉山のある蜀の地ハ都を去る事  
 遠とき僻境あり推量すする小田舎の標準あると学者の書一あり  
 あるハず俗子の筆あるハとままとぶ我今の俗竹を竹とハ小誤  
 の類る猶博識の説を俟つ

○ 苗場山

苗場山ハ越後第一の高山あり魚沼郡ハあり登り二里とハ絶頂ハ天然の苗  
 田あり依よる昔より山の名小呼よる峻岳の巔ハ苗田ある事甚奇あり  
 余よ其奇跡を尋んとハ事年ありしハ文化八年七月偶ハあり







木の枝山き枯草のど取りありありあぢうううあぢう匍匐入るむらり小作りた  
るハ野非人のをぶごさあありとを今夜のやどりふさざあうるもをうりして  
とあぢう笑ふ僕どのハ枯枝をひらひ石をあつちう假小灶をうりしめたる  
食物を調ぜんとあぢうい水をたぐひん茶を煮とび上戸ハ酒の烟をいぢも  
をじま眺魚ハ越後ハささ之浅間の烟を信濃の連山と眼下ハ波濤を千隈  
川ハ白き糸をひき佐渡ハ青き盆石をかく能登の洲崎ハ蛾眉をあり越前  
の遠山ハ青黛をのせりとあぢう眼を拭く杖乘第一の富士を視いぢるりその  
さぬ雪の一握りを置か如く人々手を拍奇ありと呼び妙ありと称讚を千  
勝万景應接する小遣あぢうを雲脚下小起うとささバ忽晴と日光眼を  
射る身ハ天外小在が如く是絶頂ハ周一里とのみ莽々たる平光高抵の所  
を不見山の名ふよが苗場とのみ所さううとあぢうありそのさぬ人のほらり  
する田の如き中小人の植するやう小苗小似する草生ひらり苗代を半とり

雪譜二編卷之下

のうーするやうある所をありとを奇ありとむらり小此田の中ハ蛙蟻冬虫  
ありて常の田を事述又いある目そのや田水枯ぎと二里の巔ハ此奇跡を觀ること  
甚不思議の天山あり案内者いらく御花園より別小徑ありて竜  
岩窟とのみ所あり窟の内ハ一條の清水あがとちのやう小古錢多く鮮口ニツ  
掛りありと神を祀るむらりより如斯とらひつとあぢう今ハ草木小塞と  
てまるとあぢうとあぢう絶頂あり石刺して苗場大権現とあり案内者ハ此石  
人作あぢう天然の物とより俗傳あぢうとあぢう見やがち日をささ小屋内ありハ  
挑燈をさげとあぢうとあぢうと外ハ火を焼くあぢうび食をさすのハ酒を  
酌六日の月皎くとてしと空もちら紀やうやう桂の枝もをぶごさあぢうの  
人々詩を賦し哥をよと俳句の吟興もありとあぢう時をうりしたるを寒  
気次第小烈しく用意の綿入もあぢうの紀うめて終夜焼火ふあぢうて夢も  
むらりあぢうあぢうのむらりあぢうあぢうあぢうあぢうあぢうあぢう御來迎を拜



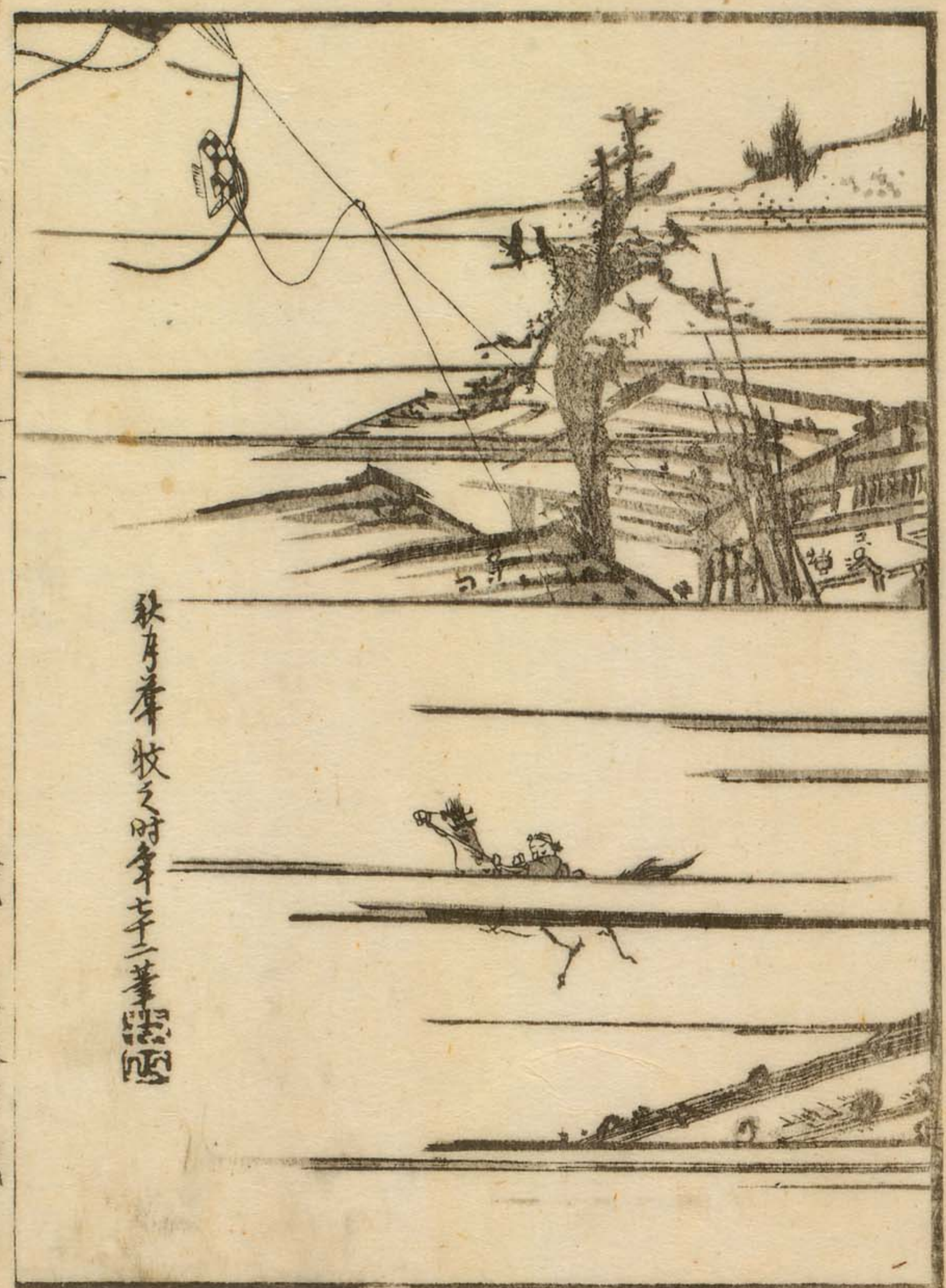
たきふと案内がいのふまうを拜所をういともの日の昇のひあを拜し志すくとのて山  
をふまうり別不紀行ありて大○百樹曰余越遊しる時牧之老人ふ此山の地勢  
を委しくまう真景の圖をも視らふ巔の平坦ある苗場の奇異竜岩  
窟くわの古跡こせきもど水あり自在の山ありまむおそくハ上古人ありて此山をひり  
絶頂ぜつてうを平坦へいたんなる馬の背せの天險てんげんをたのまてらふ住居し耕作かうさくをを  
しするが凶あつびてのち其天魂てんこんらふまうりて苗場の奇異きぎをもるをふやと思おもり  
国史こくしを捜究さうきうせば其徴しちなる端はたんをも得うべくや博達はくたつの説せつを聞きん

○三四月の雪

我国久々くわくわさうあり春ふありても二月頃までハ雨降る事あり雪のふるゆゑ  
あるづー春の半なかふいさまむ小雨あり日あり此時ふいされば晴天ハもとより雨  
ふも風あり去来しゆらいより積雪つひくもどく小消せうありさままじも家居いえありハ乾かわり  
北東きたとうあつる方ハまある事おそく山々の雪ハ里地さとちよりもまあるまおそけとごと



市中四月雪解圖



秋月年牧之時年壬子筆墨圖







その小作りわづい雪のゆきありのらんらんをまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
こを雪ふち一嵐のゆきありのらんらんをまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
と語り一事ののまじまじ三月の末ふしにまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
さて又雪中ハ馬足もたゞまを耕作もせまじまじ馬の空く厩ふあそびわく事凡  
百日あまより一我國小牛の雪まありの時ふしにまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
嘶ま路ふしんをる心ありの人も又久しにわらわすつよく作るとも一丈のう  
ひきしをまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
所ふしにわらわすつよく作るとも一丈のう  
主の貧さもまじまじの馬のまふあつて童どもも雪のまぶらわすつよく作るとも一丈のう  
まじまじの事あつてまじまじの夏のもまふしにわらわすつよく作るとも一丈のう  
草履せつふらりの用あつてまじまじの雪ふ世外の花を視るあり  
櫻も此ころをまじまじの雪ふ世外の花を視るあり

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

○鶴恩小報ゆ

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を  
二松といふもの商ひの爲西國小千谷の城下小豆苗の間旅宿の主がそま  
し小此近在の農人のまふ田地のらち小病鶴ありて死ふしんとするを  
見つけ貯る人參あつて鶴の病を養ふ小日あつて病癒て飛去りけり  
さて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭ちり舞ふづり稻二莖を落  
し一声が鳴て飛去りけり主人拾ひとりて見ふその丈六尺小あまより穂  
も是ふつと長く穂の一枝小稻四五百粒のり主人あつて去去年の  
病鶴恩小報んとて異国より怪えまじまじの何れもあつてとめり  
らつき稻ありとて領主小奉りけり小まじまじとてあつてとめりその  
まじまじ主小奉りけり中あつてあつてとて苗のころ小あつて心をつつと  
植つけり小鶴があつて小あつてとて生ひりけり國の守りも奉り



一とうり東五郎猶ちの村その人を尋まけし鶴を助けし人ち  
 東五郎が縮を賣る家あるを其の家のいり猶委く聞て其国の土  
 産小せん穀を二粒賜ふとてこけしあつて越後ハ米のよき国とてけり  
 ことさう小生ひんそのも五六粒与へるを国持りて事の来由をヤて  
 邦君小奉りしを 御城内小植しり玉ひ東五郎へ 御褒賞ある在りと  
 小千谷の人その頃物ごまよりおのれ小余かごと紀賤農もかゝるめいよき  
 御代小生とてまじくそ安居してかゝる筆も採あるとてまじく千年の昌平を  
 いのり鶴の話小筆をとらめつ猶雪の奇談他事の珍説ある漏り  
 するも最多けし生産の暇あつて編を嗣べし

通巻画圖

京水

岩瀬百鶴筆



北越雪譜二編四卷大尾

雪譜二編卷之下

甲一

文溪堂藏

京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考

五卷

本朝古印の模本を圖し制度用格を弁む考證漢印小辨を以て和漢と目せしむる朱象賢が印典の作格小倣ふ

○食物沿革考

五卷

昔の食物と今の食物の沿革を舟ト食器の古圖ありこの世諸書を引て考をあるを

○和漢押字考

三卷

俗小書判といふもの起原を考へかきもの作りやうを論弁せり

○骨董集三編

二編 卷二 四編 卷二

醒齋京傳先生遺稿京山翁増修

○女粧考

前後 六卷

○芭蕉年譜

三卷

むね成一代の始終をあるを

○高尾考

同

万治の高尾白刃小死ひりといふ奇説を論弁し高尾十一代の傳遺墨遺器をうけり

○茶の湯初心抄

同

茶の湯を学ばる人此書をこれらの大槩をあり茶席小つらありても恥をえざる心得をあるを



曲亭馬琴翁編集  
著作堂一夕話 全五卷

此書ハ曲亭馬琴翁七十余年の長壽ゆへ五十年來見聞せし  
珍説古今未發の高論あんとを弘く集め新奇妙談  
いと多く凡そ人聽人実小曲亭小對してその話を聞か  
諸君近き小發行をすらたまふべし

御伽おとぎかぶらとぎぶとぎ 全十卷

この書ハ古今の奇談珍説の原本より凡小説怪談の書  
多しといふも御伽ぶらぶらの上小つものあり和漢の奇談  
ことごとく巻中小うらやとて書きさるる変るる実小怪談奇談の最  
第一の物語あらばこの本を作るべき本ともありぬべし

鶴鷓つるぎ貞高先生著  
閑窓いんそう瑣談さうだん 全六卷

這ハ世にあらる隨筆の旨趣と事うらり雅俗を不倫博識なり  
たる珍文漢文をあらはせ兒女童蒙に讀易きをわらうと聊も学  
加自慢の事を載む古人今人の傳の面白きを集めまうと  
養生小あらるる教へんとをあらうと巻を用ひる益ありし最

天保十三年  
壬寅孟春

心齋橋通順慶町

堀屋新兵衛

全志發行書林

大坂

心齋橋博勞町

河内屋茂兵衛

江戸

大傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛藏版